

〈研究ノート〉

時事英語を活用した大学英語授業実践

— 動機づけの観点から —

今 村 梨 沙

Abstract

Contemporary authentic English materials such as news items (henceforth, Current English) are used as class materials at university classrooms these days because many companies tend to hire university students who have practical English skills. This research report explores how university students feel to use Current English as materials in class and have presentations as well as discussions. The Research Questions of this study were two-fold: (1) How do university students feel about using Current English whose topics are familiar with them in class? (2) How do they feel about having discussions and presentations based on the topics of Current English?

The participants were 5 non-English-major voluntary students including juniors and seniors. The class was elective, and students were mainly required to improve listening and speaking skills. They had 3 remote classes and 12 face-to-face ones. In both styles, they listened to news in English, answered the questions and prepared for discussions and presentations outside of the class. They had discussions in English every time and 6 presentations in classroom through the semester. After the last lesson, they answered a questionnaire outside of the class.

The results of the questionnaire showed that they felt listening to the news in English was fun, but their interests depended on the topics covered. They also felt having presentations and discussions in English was fun and challenging. This study implied that the teacher's feedback and a wide variety of topics would motivate students.

1. はじめに

大学の英語の授業で扱われる教科書や内容は、年を追うごとに変貌を遂げている。大学英語教育では、小説やエッセイを題材にした授業が多かったが、今日では文学作品よりも現代社会問題や時事英語が扱われる場面が多くなった¹ (Shiosawa, 1997; 小林, 2002)。その背景には、インターネットの普及を挙げることができる。海外ドラマや洋楽、洋画のみならず、英語でのニュースへ手軽に触れることができるようになったことは大きい。最も大きな要因としては、2002年に文部科学省が策定した「英語が使える日本人育成の戦略構想」であると考えられる。この戦略構想の趣旨の中で次のように述べられている。

経済・社会等のグローバル化が進展する中、子ども達が21世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることが必要であり、...その一方、現状では、日本人の多くが、英語力が十分でないために、外国人との交流において制限を受けたり、適切な評価が得られないといった事態も生じている。同時に、しっかりした国語力に基づき、自らの意見を表現する能力も十分とは言えない。(文部科学省, 2002)

そこで、翌年、文部科学省は「英語が使える日本人」の育成のための行動計画(2003)を発表した。この計画の中では、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」という目標が設定されている。それから10年後、社内で英語を公用語とする企業が目立つようになった²。TOEIC[®]やTOEFL[®]などの英語資格を取得することだけでなく、そのスコアに相当するコミュニケーション能力や発信力を持っていることが求められるということだ。発信力を高めていくためには、日本人があまり馴染みのない英語での口頭発表やプレゼンテーションを大学の授業で取り扱う意義が大きいと考えられる(河内, 2012)。

また、円滑にコミュニケーションを図るためには、話し手の文化的背景や世界情勢を把握しておく必要がある。そのため、英語でのニュースをはじめとする時事英語は、大学の英語の授業に必要な生の英語教材、つまり“authentic materials”なのである（小林、2002）。ただ、その難解さ故に、英語学習者が親しみにくいことも否めない。

本研究では、大学の英語の授業において、英語でのニュースをはじめとする時事英語をリスニング教材として使用し、その話題に基づく英語でのディスカッションとプレゼンテーションを行うことで、学生が英語学習をどのよう感じるかを探求することを目的とする。

2. 先行研究

今村（2021）は、2020年度春学期に私立大学法学部2年生63名を対象に、英語でのニュースをリスニング教材とし、教材で取り上げられている話題に関して英語でディスカッションとプレゼンテーションを行わせるという授業を非同期型と同期型をブレンドした遠隔授業形態で実施した。英語でのニュースのリスニング、聴解問題を解く活動、そして教員による解説を非同期型で、ニュースの話題に関する英語でのディスカッションとプレゼンテーションは無料通話アプリ Skype を介した同期型で行った。授業最終回で質問紙調査を行った結果、ほとんどの学生が英語でのニュースに関心を持って英語学習に取り組むことができ、ニュースの話題についてオンラインで英語のディスカッションとプレゼンテーションを行うことを有意義だと感じていたことがわかった。

Shiokawa（1997）は、32名の非英語専攻の大学2年生を対象に時事英語をトピックとしたライティングとディスカッションを行う授業を行った。受講生は、授業外でトピックに基づいた英語のエッセイを書いて授業へ持ち寄りクラスメイトと意見交換した。最後の授業で受講生を対象に授業に関する調査を行った結果、ほとんどの受講生が大変だったが役に立つ授業であった

と感じていた。調査の結果、リサーチ（リーディング）、ライティング、プレゼンテーション、ディスカッションを含んだ Project Approach へと発展させた授業が可能であるという教育的示唆を示した。

また、河内（2012）は、大学1年生対象の選択必修科目のリスニングの授業において、学生による身近なテーマについての Show and Tell³の手法を利用したミニ・プレゼンテーションを導入した授業を実践し、事前・事後アンケートを実施した。その結果、受講生は教員やほかの受講生からのフィードバックを最も役に立ったものだと感じていたことを明らかにした。加えて、9割以上の受講生が英語のプレゼンテーションの構成を理解することができ、大学でプレゼンテーションを教える意義があると回答した。さらに、授業を受講する前より後の方が英語でのプレゼンテーションを行うことに対する意欲が向上したと報告した。

Yamamoto（2018）は、53名の4年制大学の経営学部2年生が受講するプレゼンテーション技法を教える授業において、グループプレゼンテーションと個人プレゼンテーションを実施し、教員の観察と受講生を対象としたアンケート調査に基づき、ライティングスキルと英語でプレゼンテーションを行うことに対する自信の関係性について調査した。その結果、88%の受講生が最後の授業でプレゼンテーションを行うことに対する自信を持っていた。最も重要な要因としては、プレゼンテーションを行う前に受講生の書いた原稿を担当教員が確認した際のフィードバックであった。教員からのフィードバックがあることで、英語でのプレゼンテーションの手法を知らなかった学生が自信を持ってプレゼンテーションを行いたいと感じたことを報告した。

さらに、藤田、山形、竹中（2009）は、4年制大学の経済学部と経営学部1年生68名を対象に行った英語でプレゼンテーションを行う授業において、観察とアンケート調査による検証を行った。その結果、英語でプレゼンテーションを行う授業は学習効果を上げる有意義な授業形態であると同時に、受講生にとって身近でなかった英語でのプレゼンテーションへ自信を持たせる

ものとなったことがわかった。授業外で原稿を作成することで、授業外学習の時間を確保することができ、また人前で話すことが英語学習の動機づけとなることも明らかにした。さらに、プレゼンテーションが終わったあとに、担当教員と受講生からのフィードバックを得ることで学習意欲が増進することも強調した。

3. 調査

3. 1 調査目的

先行研究（本稿2章）で見たように、英語でのニュースをはじめとする時事英語を学習教材とした授業では、教材の難解さ故に、受講生は個人で学習を進めるよりも担当教員や他の受講生と行うディスカッションやプレゼンテーションを通して英語学習意欲を向上させる傾向にある。また、英語でディスカッションとプレゼンテーションを行う授業は、大学生が有意義な授業と考える傾向にあり、企業がグローバルな人材を求める現代の大学教育に必要な活動であることがわかる。

このような研究背景を踏まえて、学生が英語でのニュースに慣れ親しむために、プレゼンテーションとディスカッションのトピックを学生の身近に感じることのできるものに設定し、学生の関心を引き出すことのできる授業を運営する必要があると考えた。

そこで、本研究の具体的な Research Question (RQ) として、以下の2項目を設定した。

RQ1：大学の英語の授業で、英語でのニュースを身近な話題で扱うことによって、学生はどのように感じるだろうか。

RQ2：英語のニュースの話題に基づく英語でのディスカッションとプレゼンテーションを行うことを、学生はどのように感じるだろうか。

3. 2 調査協力者および調査方法

調査協力者は、関西の私立大学に通う5名（商学部3年生3名、文学部3年生1名、法学部4年生1名）であった。対象のクラスは、2021年度に開講された2年生以上を対象とした学部横断型の英語選択科目2クラスで、1クラスは受講生8名、もう1クラスは受講生1名であった。習熟度別クラス編成は行われていないため、履修生のリスニング・スピーキングなどのレベルは、不明であった。

調査は、全15回の授業終了後に授業外で調査に協力できる受講生を募り⁴実施した質問紙調査と教員による授業内の観察により行った。質問紙調査は、9名中5名の協力を得ることができた。質問紙は、多肢選択式と記述式を混合した全17の質問項目で構成した（Appendix）。Q3とQ10のみ多肢選択式とし、Q3は「5. 非常に楽しかった」、「4. 楽しかった」、「3. どちらともいえない」、「2. あまり楽しくなかった」、「1. 楽しくなかった」、Q10は「5. 非常にそう思う」、「4. そう思う」、「3. どちらともいえない」、「2. あまりそう思わない」、「1. そう思わない」の5件法で受講生に回答させた。Q2、Q4に関しては、二者択一で回答を選んだ後、記述式で回答させた。そのほかの質問項目については、すべて記述式で回答させた。受講生は、学内LMSにアップロードされたワードファイルの質問紙をダウンロードして回答を記入し、学内LMSの提出窓口に回答済みのファイルをアップロードして提出した。

3. 3 授業内容

調査対象とした授業は、リスニング・スピーキングに重点を置いた半期（全15回）の授業であった。授業で使用した教科書は、『CBS News Break 5』（熊井、Timson、2021）で、全15ユニットから構成されていた。全15回の授業形態は、新型コロナウイルスの影響により第1～3回目の3回分の授業が遠隔授業、第4回目から15回目の12回分が対面授業となった。遠隔授業で

は、受講生が最初の30分の非同期型で、各自出版社が提供している音声ストリーミングサイトにて英語のニュースを聞いて、ニュースのスキプトの空欄補充、ニュース内容に関する問題を解いた。残りの60分間はZoomによる同期型に参加し、解いた問題の答え合わせを行い、ブレイクアウトセッションを利用してニュースで取り上げられていた話題に関する英語でのディスカッションを受講生同士で行った。第4回目以降の対面授業でも予習として授業内で取り扱うニュースは数回視聴して教科書の問題を解いてから授業に臨むよう指示した。対面授業の進め方は表1に示した。また、授業で扱ったニュースは資料の表1にまとめた。毎回行うディスカッションのトピックは、教科書に掲載されているものと担当教員が独自で考えたものを併用した。

担当教員指定のニュースのトピックは、①「Declining Population, Welfare / 人口減少、福祉」、②「International Relationship, Diplomacy / 国際関係、外交」、③「Social Issues / 社会問題」とした。この3つのトピックは、日本語でのニュースでも扱われる社会問題であり、学生が身近

表1 対面授業の進め方

授業回数	授業内容
第4回	Unit 13 ニュース視聴+聴解問題演習 (40分)、ディスカッション (50分)
第5回	Unit 10 ニュース視聴+聴解問題演習 (40分)、ディスカッション (50分)
第6回	Mini presentation 1 (30分)、ディスカッション (60分)
第7回	Presentation 1 (40分)、ディスカッション (50分)
第8回	Unit 8 ニュース視聴+聴解問題演習 (40分)、ディスカッション (50分)
第9回	Mini presentation 2 (30分)、ディスカッション (60分)
第10回	Unit 12 ニュース視聴+聴解問題演習 (40分)、ディスカッション (50分)
第11回	Unit 15 ニュース視聴+聴解問題演習 (40分)、ディスカッション (50分)
第12回	教員指定ニュース①視聴 (30分)、ディスカッション (60分)
第13回	教員指定ニュース②視聴 (30分)、ディスカッション (60分)
第14回	教員指定ニュース③視聴 (20分)、Mini presentation 3 (30分)、ディスカッション (40分)
第15回	Presentation 2 (60分)、ディスカッション (30分)

に感じ、興味・関心を引き出せると考えて設定した。

また、プレゼンテーションのトピックは担当教員が設定し、トピックと内容を表2にまとめた。英語でのプレゼンテーションを一度でも経験したことのある受講生がほとんどであったが、学んできたプレゼンテーション技法や原稿作成方法の基本を振り返るため、初回の授業で担当教員が受講生に問いかけながら確認および指導をした。さらに、プレゼンテーション実施後に口頭で全体に向けて指導した。加えて、受講生にもプレゼンテーションの感想を求め、良かったプレゼンテーションに言及させることで良いプレゼンテーション技法に気づかせるようにした。

表2 プレゼンテーションのトピックと内容

プレゼンテーションの種類	所要時間	トピック／内容
Mini presentation 1	1分半以上 3分未満	Halloween in the world / 世界各国のハロウィーンの習慣や文化について紹介し、感想も述べる
Presentation 1	2分30秒以上 5分未満	How to manage time effectively / 睡眠時間を保ちながら効率のよい時間の使い方を紹介する
Mini presentation 2	2分以上 5分未満	Gender issue / 性差別問題を取り上げて自分の意見を述べる
Mini presentation 3	2分以上 5分未満	Depopulation, Welfare, Diplomacy / 人口減少、社会福祉、外交の中から一つ選んで、問題の一つ取り上げて自分の意見を述べる
Presentation 2	4分以上 6分未満	Social issues / Mini presentation 3で選んだ問題またはそのほかの気になる社会問題の一つ取り上げて紹介し、自分の意見を述べる

最終プレゼンテーションとなった Presentation 2 で受講生が選んだトピックは、“Welfare”（5名），“Diplomacy”（2名），“Depopulation”（1名），“Environmental Issue”（1名）であった。“Welfare”と“Diplomacy”に関しては、6名中4名が日本を扱った内容を発表した。

3. 4 分析方法

Q3とQ10に関しては、選択肢の回答の内訳と人数を算出した。Q2、Q4に関しては、二者択一の内訳を明らかにし、記述のあった学生のコメントを要約して書き出した。残りの質問項目に関しては、キーワード別に分類し、コメント内容を書き出した。

4. 調査結果

Q1で、授業を履修した理由を書かせたところ、5名全員が回答していた。3つのキーワード「スピーキング」（3名）、「単位取得」（2名）、「リスニング」（1名）に分類した。「スピーキング」のコメントでは、これまで読む・書くが中心の英語の授業を受講してきたため、話すことに重きを置いたこの授業を履修したと書かれていた。また、強制的に英語を話す環境を作ることを目的としていた受講生もいた。「リスニング」に言及した受講生は、英語のニュースを聞くことが自分のためになると考えたと記述していた。

Q2では、授業を受講する前後での英語のニュースに対する意識と関心の変化について尋ねた。変化が「あった」と回答した学生は3名、「なかった」と回答した学生は2名で、「なかった」と回答した学生は記述式のコメントを記入していなかった。「あった」と回答した学生のコメント内容は、「もっと様々なジャンルのニュースを聞いて、日本のニュースに対する海外の反応を知りたいと感じた」、「国によって報道のされ方が違うことに気づいた」、「英語のニュースに関心を持つようになった」（すべて各1名）であった。

Q3では、英語でのニュースを聞くことは楽しかったか尋ねた結果、「5.

非常に楽しかった」が3名、「4. 楽しかった」が2名であった。

Q4では、授業外で英語でのニュースを聞いたか尋ね、「聞いた」と答えた学生に頻度を回答させた。その結果、「聞いた」は3名、「聞いていない」が2名であった。「聞いた」と回答した3名の頻度を「課題を作成するために聞いた頻度」と「課題を作成する以外に聞いた頻度」に分けて回答させた。結果として、「課題を作成するために聞いた頻度」は、「週に1回」、「週に2回」、「毎日2時間ほど」（すべて各1名）であった。また、「課題を作成する以外に聞いた頻度」に関しては、「2日に1回程度」、「週に2回」、「1日3時間ほどを週に3回程」（すべて各1名）という結果であった。

Q5では、課題の準備を含めてどれくらいの頻度で英語のニュースを読んだり聞いたりしたかと尋ねたところ、5名全員が回答した。頻度は、「週に1回」（2名）、「毎日」（1名）、「課題をするために土日に」（1名）、「2日に1回程度」（1名）であった。

Q6では、授業で扱ったすべてのトピックの中で、関心を持って取り組むことができたトピックを書き出させて、Q7にてその理由を尋ねた。その結果、5名全員から回答を得ることができた。学生が回答したトピックとその理由は資料の表2にまとめた。

Q8で、この授業を受けてから関心を持った話題やニュース、社会問題などを尋ねた結果、5名全員が異なるトピックを回答した。回答したトピックは、「各国の行事や文化」、「KuToo運動」、「人口減少」、「各国の経済動向および政策志向」、「環境問題」であった。

Q9では、関心を持てなかったトピックとその理由を尋ねた結果、5名全員が回答し、「なかった」が4名、「あった」が1名であった。「なかった」と回答した中の1名は、「どのニュースも初めて聞いたものばかりで、非常に興味をそそられた」と記述していたが、そのほかの受講生は理由を書いていなかった。また、「あった」と回答した受講生は関心の持てなかったトピックとして、「LGBTQ etc. や性差別」と回答し、受講生自身がマジョリティ

に属する性的思考であるため共感できない部分が多く、女性の主張が極端に感じる場合も多かった、という理由を挙げていた。

Q10では、英語でのニュースは英語学習に役立つと思うか尋ねた結果、5名全員が回答し、4名が「非常にそう思う」、1名が「そう思う」と回答した。

Q11では、この授業で行った合計6回のプレゼンテーションを通して、得たものを尋ねたが、5名全員が回答していた。コメント内容を「英文を構成する（組み立てる）能力」（2名）、「要約する力」（2名）、「自分の意見」（2名）、「語彙力」（1名）、「人前で話す」（1名）の5つのキーワードに分類した。「英文を構成する（組み立てる）能力」のコメントでは、英語で論旨展開する方法や英文作成能力が身に付いたと述べられていた。「要約する力」では、受講生が自分の主張を限られた語数で要約する力が伸びたと感じていた。また、「自分の意見」を大切にしながら、他者に自分の考えを伝える力が身に付いたという記述があった。ほかには、「語彙力」が付いた、「人前で話す」力が付いたと回答していた。

Q12では、英語でのプレゼンテーションをどのように感じたか尋ねたところ、5名全員が回答した。コメント内容を「やりがいを感じた」（3名）、「楽しかった」（2名）の2つのキーワードに分類した。「やりがいを感じた」と書いた受講生は、毎回原稿を作成することは大変だったが、担当教員のフィードバックを得ることで成長を感じながら取り組むことができたと書いていた。「楽しかった」と回答した受講生は、大変だったが他者の発表を聞くことと自分の意見を伝える楽しさを知ったと書いていた。

Q13では、プレゼンテーションの準備をする上で困ったことを尋ねたところ、4名が記述しており、1名が無記入であった。4名のコメント内容を「翻訳／英訳／変換」（3名）、「トピック」（1名）の2つのキーワードに分類した。「翻訳／英訳／変換」では、自分の考えや意見を意図した通りに英語で表現することができない苦悩が綴られていた。また、よりよいプレゼンテーションを行うためには、担当教員に質問しやすい雰囲気を築く必要があり、

日本語訳を添えた原稿を事前に担当教員に提出して添削を受ける必要があると考える受講生もいた。「トピック」のコメントでは、予備知識のあるトピックは原稿を作りやすいと感じたが、身近に感じることでできない話題に関しては苦労したと記述していた。

Q14では、プレゼンテーションを実施する立場として、楽しかったまたはやりがいを持って取り組むことができたトピックを尋ねたところ、5名全員が回答していた。回答にあったトピックは、「最後に扱った社会問題」(3名)、「福祉問題」(2名)、「政治経済」(1名)、「環境問題」(1名)であった。記述のあったトピックは、「環境問題」と「政治経済」と回答した1名のみであり、これまではあまり身近な問題として捉えることができなかった話題もプレゼンを通して、身近な問題として考えることができ、さらに違う分野にも興味を持つことができた、という記述をしていた。

Q15では、プレゼンテーションを聞く側として、楽しかったトピックとその理由を尋ねた。被験者のうち1名は受講生1名のクラスに属していたため、本質問項目は4名を対象とした。その結果、4名全員が記述しており、楽しかったトピックは「各国の社会問題」(2名)、「すべてのトピック」(1名)、「IT系の話」(1名)であった。「各国の社会問題」を選択した理由として、受講生がどの国のどういった問題を発表するかわからない点が楽しみであったと挙げられていた。また、「IT系の話」は受講生がトピックと関連させて他科目で自身が学んだことを話していたので興味深かったと書かれていた。

Q16では、プレゼンテーションを実施する立場として、工夫したことを尋ねたところ、4名が複数回答しており、1名は「うーん…」とだけ記述した。4名が書いたコメント内容をキーワード別にまとめると、「表現・単語」(2名)、「自分の意見」、「アイコンタクト」、「まとめること」、「スライド」(すべて各1名)であった。「表現・単語」と回答した受講生は、できるだけ難しい単語や表現を用いないようにし、聞き手に読み聞かせるように抑揚に気を付けて話したと述べていた。

Q17では、受講生同士でディスカッションをして得たものを尋ねた。被験者のうち1名は受講生1名のクラスに属していたため、本質問項目は4名を対象とした。その結果4名全員が記述していた。結果は、「意見」(3名)、「自分の語彙力」(1名)の2つのキーワードに分けた。「意見」のコメント内容は、自分以外の受講生の考えや意見を知ることができたというものであった。残り1名の受講生は、自身の語彙力のなさを痛感したと記述していた。

Q18では、授業全体を振り返って、各学生の取り組み状況や今後に活かしたい点などを自由記述で書かせたが、5名全員が数行に渡って回答していた。コメント内容を「スピーキング」、「興味・関心」、「プレゼンテーション」、「リスニング」(すべて各2名)の4つのキーワードに分類してコメントを整理した。「スピーキング」に言及した受講生は、英語で自分の意見を伝える難しさを痛感し、スピーキング力を改善したいと感じ、今後の留学生活で生かしたい、と述べた。また、留学予定のない受講生も英語圏出身の友人を作り、日常生活で積極的に英語を使用したい意思を示した。「興味・関心」がキーワードとなったコメントでは、英語でのニュースに触れることで興味・関心が広がったと書いた。「プレゼンテーション」に言及した受講生は、限られた時間でプレゼンテーションの準備をしてやりがいを感じることができたと書いた。また、4年生は今後就職してプレゼンテーションを行うかは不明ではあるが、機会があれば抵抗なくうまくできると自信を見せた。「リスニング」に言及した受講生は、この授業で英語のニュースを聞くことで、今後英語の資格試験の勉強に活かしたいと述べた。さらに、授業を受けてから日常的に英語の動画配信サービスを利用して字幕を利用しながら英語の勉強を始めたと書いた受講生もいた。

5. 考察

5. 1 RQ1に関する考察

第一の研究課題は、「大学の英語の授業で、英語でのニュースを身近な話題

で扱うことによって、学生はどのように感じるだろうか。」であった。まず、Q1のコメント内容から、これまで英語を「聞く」・「読む」というインプット (Input) 中心の授業を受けてきたので、「話す」というアウトプット (Output) を目的として履修した学生が半数以上いたことがわかる。次に、履修前後で英語のニュースに対する意識の変化としては、「あった」と肯定的な変化を実感している受講生が3名いた (Q2) ことから、この授業を通して、英語でのニュースに関する学生の関心を引き出すことができたと思えることができる。同時に、Q3にて英語でのニュースを聞くことが「非常に楽しかった」または「楽しかった」と全受講生が回答したことから、英語でのニュースをリスニング教材とすることで受講生は楽しく関心を持って英語学習に取り組むことができたと思えることができる。また、Q4において、授業外で英語でのニュースを「聞いた」と回答した受講生は3名に留まったが、Q4の回答より、課題を作成するためだけでなく主体的に英語でのニュースを聞くようにしていたことがわかる。授業外で英語でのニュースを「聞いていない」と回答した受講生もQ5にて、課題の準備を含めてどれくらいの頻度で英語のニュースを読んだり聞いたりしたかと尋ねた際に回答していることから、英語でのニュースを聞いてはいないが「読んだ」と捉えることができる。この2名の受講生に関しては、この授業を通して、英語を「聞く」という学習意欲を向上させることができなかつたかもしれないが、英語のニュースに触れさせることはできたといえる。

トピックに関する質問項目では、Q6とQ7の回答内容より、関心を持って取り組むことができた話題として挙げているものが気候変動と政治経済であったことから、授業で扱ったニュースよりも他の受講生が発表した内容や自分で調べた社会問題に関心を持ったことがわかる。実際、授業中のディスカッションで、受講生が関心を持ったと書いていないトピックを扱った時は、会話が途切れる場面が目立った。反対に、各受講生が身近に感じるトピックであった場合は、積極的な発言が多かった。

また、Q8において、この授業を受講してから関心を持ったトピックにおいても、授業で扱ったニュースよりも教員指定のニュースおよびプレゼンテーションのトピックであった「人口減少」、「各国の経済動向および政策志向」、「環境問題」を挙げていることから、今回担当教員が指定したトピックが受講生の関心を引き出すことができるものであったと捉えることができる。加えて、Q9で関心の持てなかったトピックはなかったと回答した受講生が4名で、すべてのトピックを楽しむことができたというコメントもあった。残りの1名はLGBTQおよび性差別と回答し、受講生にとって身近に感じるができないトピックは関心が薄れてしまうことがわかった。トピックに関しては、関心が個人によって異なるため、受講生の観察も行いながら、臨機応変に設定をする必要性が示唆された。

また、Q10において、英語でのニュースが英語学習に役立つか尋ねたところ、「非常にそう思う」が4名、「そう思う」が1名であったことから、受講生は英語でのニュースが学習教材として有効だと感じたことがわかった。

以上のように、総じて受講生は関心を持って楽しく英語でのニュースを学習することはできたが、身近に感じることでできないトピックへは関心を持ちにくい傾向にあるため、受講生の関心も踏まえて扱うニュースを選ぶ重要性が示唆された。

5. 2 RQ2に関する考察

第二の研究課題は、「英語のニュースの話題に基づく英語でのディスカッションとプレゼンテーションを行うことを、学生はどのように感じるだろうか。」であった。まず、Q11のコメント内容から、合計6回のプレゼンテーションを経験することで、スピーキングよりライティングに関わるスキルを身に付けることができたと感じた学生が多いことがわかる。特に、英語での論旨展開の方法、ニュースを要約する方法や伝え方を意識して準備していた。この授業はリスニングとスピーキングに重点を置いた授業であったが、受講生は

プレゼンテーションの原稿を作成することで、ライティングによる発信力を養うことができた実感していた。また、プレゼンテーションを行うことに関して、Q12のコメント内容から、すべての受講生が困難さを感じながらも、楽しくやりがいを持って、充実したものであったと感じていたことがわかる。一方で、受講生はプレゼンテーションを準備する段階で困難だと感じたこともあり、特に多かった点は、原稿を作成する際、自分の考えを英語で表現することであった。実際、授業中のディスカッションでも突然受講生を指名した際、自分の考えはあるが英語で表現できないと答えた場面も複数回見受けられた。Q13のコメントからもわかるように、プレゼンテーションを行う前に、担当教員のフィードバックを得てから実施したいと考えた受講生もいた。担当教員からのフィードバックに関しては、Yamamoto(2018)と河内(2012)が明らかにしたように、受講生がプレゼンテーションを行う自信と意義を感じて取り組むことができる第一要因なので、必要な要素だと考えられる。加えて、Q11の結果から、受講生はライティングによる発信力を養うことはできたが、即興、あるいはすぐに英語で意見を発信することを円滑に行うことに苦戦したことが明らかとなった。この点においても、担当教員が発言を促すことができるよう工夫が必要だといえる。

プレゼンテーションを行う立場、そして聞く立場のずれにおいても、楽しかったトピックは授業最終回で扱った Presentation 2 の社会問題が最も多かった。その理由としては、社会問題はトピックの選択肢が広がったことが挙げられる。また、Q14にて記述をした1名の受講生が書いていたように、プレゼンテーションを通して受講生が身近に感じることでできたトピックは楽しく、やりがいを持って取り組むことができたことがわかった。さらに、プレゼンテーションを行う立場で工夫したこととして、最も多かった回答は表現や単語についてであり、次いで意見を伝えることやアイコンタクト、スライドなどが挙げられていることから、Q13でプレゼンテーションを行う側として困った点としても挙げられていた「伝える」という点を意識した結果だと

考えられるので、受講生が懸命にプレゼンテーションの準備に取り組んだ証だということができる。その熱意を促したものは、Q17のコメント内容から他の受講生とのディスカッションだったと考えることができる。他の受講生の意見を聞くことで、ディスカッションとプレゼンテーションで発表する内容を熟考する機会となったといえる。最後に、Q18において全体を振り返ってのコメントから今後スピーキング力を伸ばしていけるように取り組んでいたり、取り組もうとしたりしている受講生が存在し、英語でのニュースに触れたことで興味・関心が広がったことも明らかとなり、今後のプレゼンテーションとリスニング力向上への意欲も見られた。

このように、受講生は英語でのニュースの話題に基づくディスカッションおよびプレゼンテーションを行うことで、他者の考えや意見を知ることができ、ディスカッションとプレゼンテーションの価値を見出すことができたと考えられる。身近に感じることでできるトピックに基づいて、自らの意見を「伝える」ということを意識して取り組み、他者の考えも尊重することに関して、難しさを感じながらも楽しさとやりがいを感じていたことが明らかとなった。

6. おわりに

本研究の結果、大学の英語授業で英語でのニュースをリスニング教材として扱い、ニュースの話題に関してディスカッションとプレゼンテーションを行うことは、学生にとって楽しくやりがいのあるものであることがわかった。また、扱うニュースやディスカッションのトピックに関しては、受講生が身近に感じることでできるものであれば、なお関心を持って取り組むことができることが明らかとなった。さらに、プレゼンテーションに関しては、原稿作成の段階のライティングで苦戦したと同時に、「伝える」ということを意識して準備していた。「伝える」という点を意識して学習するということは、文部科学省（2002）が指摘した「しっかりした国語力に基づき、自らの意見

を表現する能力」を育成する重要な動機づけだと考える。こうした動機づけを向上させるために、担当教員のフィードバックや他の受講生との意見交換は不可欠なものだといえる。さらに、プレゼンテーションを行う立場、聞く立場のいずれにおいても、身近に感じることのできる話題を好む傾向があったため、話題を提供する際は、受講生の関心を引き出すことのできるトピックを担当教員が授業観察を通して、熟考して提供する必要があることも示唆された。

今回の研究対象は、選択英語科目であったことと調査協力者が5名であったことから、今後対象人数と科目を増やして実践と考察をする必要がある。また、今回は授業外での質問紙調査を行ったため、協力者が限定的であった。授業時間内に事前事後アンケートを実施する時間を設けることができるような授業計画を行うことで、より多くの受講生の受講前後の英語でのニュースに対する意識の変化を調査することが可能だ。加えて、今回の質問紙は記述式が多く、被験者が回答に躊躇った形跡も見受けられたため、多肢選択式の項目も増やし、質問項目の内容も吟味する。

今後もグローバル化に対応できる人材を育成するために、学生が関心を持って英語でのニュースをはじめとする時事英語を題材に英語運用能力を向上できるような授業を運営していきたい。

注

- 1 一例として、小樽商科大学では、1984年に英語必修科目で使用されていた教科書の中で文学作品を扱っているものは、全体の57.9%であったが、2001年には12.9%に激減している（小林、2002）。
- 2 仁科（2012）によると、大手電機メーカーであるシャープは2010年に、楽天やユニクロは2012年を目途に社内で英語を公用語にすると発表し、パナソニックは2011年度の新卒採用の80%を外国人にすることを発表した。
- 3 英語学習者が自分にとって身近な物や場所などについて、実物や写真を見せながら（show）語る（tell）活動のことで、プレゼンテーションの一種である（村野井、渡部、尾関、富田、2012）。

4. 最後の授業で質問紙調査を行う予定であったが、最後の授業で行ったプレゼンテーションおよびディスカッションが予定より大幅に長引いたため、授業外で実施した。

引用文献

- 藤田玲子、山形亜子、竹中肇子 (2009). 「学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有用性」『東京経済大学人文自然科学論集』128、35-53.
- 今村梨沙 (2021). 『英語でのニュースを用いた大学の英語授業実践—学習動機に着目して—』全国英語教育学会第46回長野研究大会、オンライン開催.
- 河内智子 (2012). 「学生によるプレゼンテーションをリスニングの授業に導入する意義」『成蹊大学一般研究報告』46、1-19.
- 小林敏彦 (2002). 「時事英語教授法—複合的アプローチによるメディア英語の習得—」『樽商科大学人文研究』103、23-83.
- 熊井信弘、Timson, S. (2021). 『CBS News Break 5』東京：成美堂.
- 文部科学省 (2002). 「英語が使える日本人育成の戦略構想」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm (閲覧日：2022年3月8日)
- 文部科学省 (2003). 「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/04031601/005.pdf (閲覧日：2022年3月8日)
- 村野井仁、渡部良典、尾関直子、富田祐 (2012). 『統合的英語科教育法』東京：成美堂.
- 仁科恭徳 (2012). 「発信型英語教育を目指す教材開発の裏側—計量的観点から見た英語プレゼンテーション教材の妥当性と改善点の一考察—」『立命館高等教育研究』12、225-242.
- Shiokawa, H. (1997). Teaching current English through critical writing. 『時事英語学研究』36、73-83.
- Yamamoto, Y. (2018). The correlation between self-confidence and achievement in an oral presentation course. 『都市経営：福山市立大学都市経営学部紀要』10、115~128.

資料

表 1 授業で扱ったニュース

授業内で扱った教科書のユニット	内容／分野
Unit 9 Grammar Table Lady Offers Advice	英文法／言語教育
Unit 6 Sleepless in Japan	日本人もアメリカ人も睡眠不足／健康問題
Unit 13 Mindfulness: Schools in England Teach Students to Relax	イギリスの学校でのリラクセス法／健康問題
Unit 10 Halloween Treats for Kids with Disabilities	全ての子どもたちが楽しめるハロウィーン／文化
Unit 8 Cracking the Dress Code: #Ku Too Movement	#KuToo 運動／ジェンダー
Unit 12 Japan Really Loves Kit Kat Bars	日本式 Kit Kat の販売戦略／マーケティング
Unit 15 The Great Train Race: Rail Serve in Japan and the U. S.	アメリカと日本の鉄道比較／文化

表 2 関心を持って取り組むことができたトピックとその理由 (Q 6、Q 7)

トピック	人数	理由
“Sleepless in Japan” (Unit 6)	1名	アメリカも睡眠不足とは知らなかったし、睡眠不足の悪影響について学べたことで改めて睡眠の大切さを感じることができたから (1名)
“Cracking the Dress Code: #KuToo Movement” (Unit 8)	1名	日本は職場に関わらず暗黙のルールが多いと以前から感じていたので石川ユミさんの考えにはとても共感できたから (1名)
“Japan Really Loves Kit Kat Bars” (Unit 12)	1名	身近に食べている日本の伝統的なお菓子であるキットカットに注目することが面白く、日本人と海外の方で好みが分かれることは初めて知ったから (1名)
“The Great Train Race: Rail Service in Japan and the U. S.” (Unit 15)	1名	日本の交通機関が時間通り到着することは有名だと思うが、それは逆にそれだけ日本が時間に厳しい国であり、幼いころから時間を守るように教わっているからだと思いい、文化の違いが影響していると分かったから (1名)
健康問題について	1名	私自身気をつけなければならないと感じたから (1名)
日本の文化系	1名	キットカットなど日本のものを外国でニュースとして取り上げていて面白いなと思ったため (1名)
気候変動に関わるニュース全般	1名	SDGs などに関心があるから (1名)
政治経済	1名	英語でニュースを読んだ時、日本で知ることのできるニュースには偏りがあり、バイアスを取り除きたいと感じたから。また、政治の動向を知ることは、国際貿易を職種とするうえで自分の将来にも役立つし、株の取引をしているため、情勢に詳しくないといけないと感じたから (1名)

Appendix

Review sheet

授業担当者は、英語でのニュースは英語学習教材として非常に有効な教材であると考えており、ニュースの話題について自分の考えを英語で発信（プレゼンテーションを）することは重要だと考えています。そこで英語でのニュースを学習することとプレゼンテーションを行うことについて、どう感じたか学期を振り返って教えてください。

Q 1. この授業を履修した理由を教えてください。

Q 2. この授業を受講する前と後では、英語でのニュースに対する意識や関心に変化はありましたか？あればどのように変化したか教えてください。

あった（）

なかった

Q 3. 英語でのニュースを聞くことは楽しかったですか？

非常に楽しかった・楽しかった・どちらともいえない・

あまり楽しくなかった・楽しくなかった

Q 4. 授業外で英語でのニュースを聞きましたか？「聞いた」と答えた人は、どれくらいの頻度で英語のニュースを聞きましたか？

聞いた

課題を作成するために聞いた→頻度と時間（）

課題を作成するため以外にも聞いた→頻度と時間（）

聞いていない

Q 5. 課題の準備を含め、どれくらいの頻度で英語のニュースを読んだり聞いたりしましたか？

Q 6. 関心を持って取り組むことができたトピックは何でしたか？

Q 7. 6 の理由を教えてください。

- Q 8. この授業を受けてから関心を持った話題やニュース、社会問題などがありますか？
- Q 9. 8とは反対に、関心を持たなかったトピックがあれば書いてください。また、理由があれば書いてください。
- Q10. 英語でのニュースは英語学習に役立つと思いますか？
非常にそう思う・そう思う・どちらともいえない・
あまりそう思わない・そう思わない
- Q11. この授業ではミニプレゼンテーションを半期で5回、最終プレゼンテーションを1回行いました。得たものを教えてください。
- Q12. 英語でのプレゼンテーションはどのように感じましたか？（楽しかった、やりがいを感じたなど）
- Q13. プレゼンテーションの準備をする上で、困ったことがあれば書いてください。
- Q14. プレゼンテーションを行う側として、楽しかったまたはやりがいを持って取り組むことができたトピックはどのトピックでしたか？
- Q15. プレゼンテーションを聞く側として、楽しかったプレゼンテーションはどのトピックでしたか？
- Q16. プレゼンテーションを行う側として、工夫したことは何ですか？
- Q17. この授業ではクラスメイト同士でディスカッションも行いました。得たものがあれば教えてください。
- Q18. 授業全体を振り返って、ご自身の取り組み状況や今後に活かしたい点など自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。